令和８年度第２回（第 13 期第５回）さいたま市社会教育委員会議　会議録

開催日時：令和８年８月 24 日（月）10 時 00 分～12 時 00 分
開催場所：ときわ会館　小ホール
出席者名：【委　員】梶野　光信議長、石川　敬史副議長、岩城　明子委員、
河合　裕委員、澁谷　知範委員、関根　広美委員、
田中　亜弓委員、野津　美智代委員、橋本　洋光委員、
宮島　和宣委員、矢作　修一委員、和田　洋樹委員
【一般社団法人コミュニティーサポートセンターさいたま】
関根　広美様（第 13 期社会教育委員）、永井　祐子様
【事務局】（生涯学習部）　深津　健太郎
（生涯学習振興課）八島　典子、安藤　紘子、栁田　正明、
山本　直子、坂本　聡、駒井　友里香
欠席者名：小林　玲子委員、鶴ヶ谷　柊子委員、吉川　洋一委員
公開・非公開の別：公開
傍聴人の数：なし

１　開　　会

２　挨　　拶

３　議　　事

⑴　前回会議について

令和８年度第１回会議の概要について、会議録に基づき説明した。

⑵　ワークショップ

ア　事業説明

資料２に基づき、一般社団法人コミュニティーサポートセンターさいたま様より、同団体の桜環境センターにおける取組についての説明が行われた。

【質疑応答・意見】

＜矢作委員＞

昨日、施設を訪問し掲示物等を拝見した。利用団体の活動内容について、掲示だけでなく、LINE や Facebook 等で誰でも閲覧できる環境が整備されているのか伺いたい。

＜コミュニティーサポートセンターさいたま＞

エコフェスタのホームページ内に各団体の紹介ページを設け、活動内容を掲載している。施設内でも掲示を継続していて、活動への参加希望者から問い合わせがあった場合は、活動日を案内したり、代表者につないだりして参加を促している。

＜矢作委員＞
　学校の社会科見学でごみ処理施設を見学する機会があるが、利用団体の活動内容についても触れる機会はあるのか。

＜コミュニティーサポートセンターさいたま＞
　現状では、社会科見学はごみ処理に関する学習が中心であり、環境啓発施設や利用団体の活動について説明されることはない。ただし、見学コースの途中で施設が見えるため、興味を持った子どもが後日保護者と来館するケースはある。周知のためSNS等も活用しているが、広く知ってもらうことは課題である。

＜矢作委員＞
　昨日も親子が体験コーナーで工作やゲームを楽しんでいる様子を見た。
　最後に、外部との連携について伺いたい。利用団体が講師となり、サマースクール等を行っていると思うが、育成会事業などとの連携を考えた際に、出前講座や講師派遣は可能か。

＜コミュニティーサポートセンターさいたま＞
　可能である。今は連携の機会は少ないが、過去にも実施したことがある。下水道事業団など、県の施設を訪問し私たちも体験をするというようなことも行ってきた。サマースクールは私たちにとっても有意義な場であり、今後も積極的に連携したいと考えている。

＜橋本委員＞
　長年にわたり幅広い活動を継続されていることに敬意を表したい。近年、気候変動問題が世界的な課題となっているが、そのような地球規模の問題と日頃の活動との関わりについて教えていただきたい。

＜コミュニティーサポートセンターさいたま＞
　利用団体の活動は「楽しいから続ける」という側面が大きく、直接的に気候変動問題を扱うことは少ない。しかし、過去には環境問題をテーマとした講演会を開催したこともある。また、施設内のビオトープや田んぼの管理を通じて、降雨の変化や樹木・雑草の成長の早さなど、気候変動の影響を身近に感じている。ただ、それらを市民に伝える機会はなかなかないため、今後取り組んでいきたいと考えている。

＜橋本委員＞
　やはり発信は難しいということか。

＜コミュニティーサポートセンターさいたま＞
　一つのテーマに絞って伝えることは難しいという面がある。

＜澁谷委員＞
　生涯学習ビジョンでは「人づくり」「つながりづくり」「まちづくり」が掲げられているが、特に生涯学習を通じた「まちづくり」はハードルが高いとの印象がある。今回のお話で、講座に参加した市民が新たに団体を設立するための支援をしていて、実績もあるということが印象的だった。具体的にどのような支援を行うと市民が学ぶ立場から地域活動の担い手へと変化していくのか、何かお考えがあれば教えていただきたい。

＜コミュニティーサポートセンターさいたま＞
　新たな活動を始めたい人には、まず利用団体として登録するために必要な会則や規約づくりを支援している。また、団体運営を継続するためには、将来的なトラブルも想定したルールづくりが重要であることを伝えている。過去には団体運営上の問題で活動が継続できなくなった例もあったため、相談に乗りながら支援してきた。
　さらに、団体には寿命があり、同じ人が永続的に続けるものではない。その時々の思いを持った市民が活動し、次の世代へ引き継いでいくことが重要であると考えている。そのため、市民の経験や力を高め、いつでも活動の担い手になれる人々を増やすことを意識している。

＜梶野議長＞
　市の環境局と団体の関係や、施設運営の仕組みについて教えていただきたい。

＜コミュニティーサポートセンターさいたま＞
　桜環境センターはPFI事業として、15年間の契約で運営されている。株式会社エコパークさいたまが受託し、その中でクリーン工房が余熱体験施設部分の指定管理を担っている。私たちの団体はその運営体制の中で活動している。
　施設整備の段階から行政、企業、NPOが参加し、施設のあり方や運営方針について協議を重ねてきた。さいたま市には、NPOの力を活用して地域住民の参加を促進しようという姿勢があり、それに応える形で活動を進めてきた。

＜梶野議長＞
　開設はいつか。

＜コミュニティーサポートセンターさいたま＞
　2015年である。

＜梶野議長＞
　現在、多数の事業を実施しているが、事業数はあらかじめ決まっているのか。

＜コミュニティーサポートセンターさいたま＞
　大きなイベントが１つ、中規模なものが２つ、その他に講座をいくつか実施するということは決まっているが、実際には、それを上回る数の事業を行っている。スタッフの意欲が高く、むしろ事業を減らすよう伝えている状況である。

＜梶野議長＞
　参加費は徴収しているのか。

＜コミュニティーサポートセンターさいたま＞
　サマースクールや講座では材料費相当を徴収することがあるが、多くはワンコイン程度であり、無料で参加できる事業も多い。

＜梶野議長＞
　その収入はどのように扱われるのか。

＜コミュニティーサポートセンターさいたま＞
　参加費は材料費や講師謝礼に充てられ、運営団体の収益にはならない。運営費はPFI契約に基づく費用で賄われている。

＜和田委員＞
　桜区は市民主体のイベントが活発な印象がある。そうした活動を取りまとめる中心的な組織があるのか、それとも自然発生的に役割分担が行われているのか伺いたい。

＜コミュニティーサポートセンターさいたま＞
　それぞれの団体が責任を持って事業を実施しているが、できる範囲で協力し合う形をとっている。年度当初には関係者で十分に打合せを行い、方向性を共有している。また、LINEなどSNSを活用して情報共有を進めており、少人数でも連携しながら事業を運営できている。
　地域には防災や子育てなど様々な分野の経験豊富な人材がおり、こうした人材とのネットワークが活動を支えている。リユースマーケットなどには子どもから高齢者まで多くの市民が参加している。

イ　グループワーク（発表）
＜Ａグループ（発表者：橋本委員）＞
　今回のお話を受け、市民が参加しやすい環境づくりを通じて、新たな環境活動団体が生まれている点が印象に残った。活動に参加する人はそれぞれに思いや関心を持っており、それらを受け止めながら活動につなげていることが、多様な団体や取組の広がりにつながっているように感じた。また、市民一人一人の自己実現を支えることを大切にしている点も特徴であり、そうした関わり方が参加のし

やすさや活動の継続につながっているとの意見が出された。
　また、自然に関わる活動には男性も参加しやすい傾向があり、男女が比較的バランスよく参加していることも興味深かった。それぞれの知識や経験を生かして活動できることが参加のしやすさにつながっているのではないかとの意見があった。さらに、子どもや若者の参加を促すことは、活動を次の世代へつないでいく上でも重要な視点であるとの意見が出された。
　組織づくりについては、横のつながりを大切にし、オープンで対等な関係の中で活動が進められている点が特徴として挙げられた。こうした柔軟な組織のあり方が、市民の主体的な参加を促し、多様な人が関わりやすい環境につながっていると感じた。
　また、学校との連携についても話題となった。現時点では学校との関わりを中心とした活動は多くないとのことであったが、学校側から見ると、地域の様々な活動や団体をつなぐ役割が重要になるとの意見があった。そのため、地域学校協働活動推進員など、コーディネーターの役割は大きく、市民参加を支える上でも重要であると考えられる。今後は、こうしたコーディネート機能を担う人材の育成や、PTA等との連携を通じて、子どもたちが地域活動に参加する機会を広げていくことも期待できるのではないかとの意見が出された。

＜Ｂグループ（発表者：矢作委員）＞
　Ｂグループはいくつかの視点でまとめを行った。
　まず、学びの場については、自分の知らないことを知る楽しさを広げるとともに、その学びを他者と共有できる環境づくりが重要であるという意見が出された。個人の学びを深めるだけでなく、学びを通して人が集い、交流できる場の充実が求められている。
　次に、人とのつながりについては、ワークショップや地域活動などを通じてコミュニケーションの輪を広げることの重要性が挙げられた。また、異年齢の人々が交流する機会は、子どもだけでなく大人にとっても学びや成長につながると考えられている。さらに、地域には優れた活動を行っている団体が数多く存在するため、それらを結び付けるコーディネーターの役割が重要であり、人や団体のつながりを広げることで、学びの輪もさらに発展していくとの意見があった。
　体験を通じた成長については、自然や身近な環境との関わりが不足していることが課題として挙げられた。例えば、虫に触れたり自然の中で過ごしたりする経験が少なくなっているのではないかとの指摘があった。そのため、自然と触れ合える機会や環境を充実させることが必要であると考えられている。
　最後に、まちづくりの視点では、地域で活動する団体やグループをつなぎながら、市民が四季を感じて暮らせるまちを目指すことが重要であるとの意見が出された。さまざまな活動や交流を通じて、「さいたま市に住んで良かった」と市民が実感し、幸せを感じられるまちを実現することが求められる。そのような視点で、今後ビジョンを具現化していくことが重要であると感じた。

＜Ｃグループ（発表者：田中委員）＞

私たちのグループでは、主に「仕組みづくり」の視点から意見交換を行った。

まず、2015 年頃に多くの NPO 法人が設立された経緯に着目し、当時どのような仕組みによって意欲ある人々の活動が生まれたのかを改めて検証し、その要因を今後に生かしてみてはどうかという意見が出された。

また、仕組みを考える際には、過去の活動内容をそのまま継承するのではなく、時代や社会状況に応じて必要なものを柔軟に取り入れていく姿勢が大切であるとの考えが示された。あわせて、参加者の底上げをし、学び手が次の担い手や伝える側へと成長していく循環を生み出す仕組みが必要であるとの指摘もあった。人材育成を通じて活動の裾野を広げ、継続的な発展につなげていくことが求められている。

さらに、活動を推進するためには、細かなルールで縛るのではなく、大きな方向性や核となる理念を明確にしながらも、個々の自由な発想や主体的な活動を生かせる仕組みが重要であるとの意見が出された。また、組織として活動が発展した際には、その組織を維持・保護し、安定的に運営できる環境を整えることも必要であるとされた。

加えて、広報の充実も重要な課題として挙げられた。効果的な広報によって参加者を増やし、その参加者が将来的に活動の担い手へと成長していく流れをつくることが期待されている。

最後に、今回のビジョン策定については、活動や考え方を次世代へ引き継ぐことは大切である一方で、時代ごとに求められるものは変化するため、一定の期間を区切って取り組み、その後は次の世代が新たな視点で発展させていく余地を残しておくことも重要であるとの意見でまとめられた。

（ウ） 本日のまとめ

＜石川副議長＞

今回のワークショップを通じて、身近な事柄が学びやつながりづくりの入り口になると感じた。大きな社会課題を考える際には、まず自分たちの日常生活や地域に根差した事柄から関心を持つことが重要であり、そこから地域社会、さらにはより広い社会へと視野を広げていくことができるのではないかと考える。抽象的なテーマであっても、身近な暮らしとの結び付きの中で捉えることで、より主体的な学びにつながるように感じた。

また、報告の中で示された、団体を管理するのではなく、活動を後押しするような組織運営の考え方が印象に残った。一つの団体が世代交代などによって役割を終えたとしても、同じような目的を共有する新たな主体が生まれていけばよいという話があったが、こうした緩やかな組織づくりは、多様な人々の参加を促し、世代を超えた交流や地域活動の継続につながる重要な視点であると感じた。

さらに、地域での暮らしを考える際には、循環という視点も大切であると感じた。以前、建築史の先生から聞いた「ライスサイクル」の話では、人々の暮らしが自然や地域の資源と深く関わりながら成り立っていることが示されていた。こ

うした視点を踏まえ、次期ビジョンについて考えるにあたり、自然環境を大切にしながら地域で生きるという考え方を盛り込むことができればよいと感じた。

＜梶野議長＞

今回のワークショップは非常に興味深く、多くの気付きや学びを得る機会となった。特に印象に残ったのは、多数の講座や事業が継続的に展開されていることである。その背景には、企画者自身の「やりたい」「みんなと考えたい」という思いがあり、そうした内発的な動機が活動を支えているのではないかと感じた。また、PFI 事業の枠組みの中でありながら、事業者のアイデアが生かされるだけでなく、市民の声も反映される仕組みとなっている点に大きな関心を持った。施設管理と比べて学習事業や人づくりの分野を担うことは難しいと言われることもあるが、そうした課題を乗り越えて事業を実施されているのだと感じた。

また、今回の議論を通じて、コーディネーターの存在や役割の大切さを改めて感じた。人と人とのつながりは自然に生まれるものではなく、その間をつなぎ、活動を支える役割が重要である。一方で、その価値を行政の中でどのように理解してもらい、必要な支援につなげていくかという点には課題もある。コーディネーター個人に着目するだけでなく、その役割や効果をどのように示していくかについても考えていく必要があると感じた。

さらに、組織づくりのあり方についても学ぶことが多かった。複雑化する地域課題に対応するためには、人々が力を持ち寄りながら活動していくことが求められる一方で、従来型の固定的な組織だけでは対応が難しい場面もある。多様な人々が参加し、それぞれの力を生かしながら柔軟につながる組織のあり方は、今後の地域づくりを考える上で重要な視点であると感じた。

加えて、環境分野は男性も比較的参加しやすい側面があるという話も印象に残った。生涯学習や地域活動の分野では、退職後の男性がどのように地域と関わるかが課題として挙げられることが多いが、参加や活躍につながる新たな可能性を感じることができた。今回のワークショップで得られた気づきや視点を、今後のビジョンを検討していく上で参考としていきたい。

４　連　　絡

生涯学習フェスティバルと生涯学習学びのネットワークの概要について説明した。

５　閉　　会

以上

Ａグループ

学校とのつながり

- 小・中・高の総合学習への支援
  ↓
  地域へ参加
- ＰＴＡへの働きかけ
- 地域学校協働活動推進員コーディネーターの働き

コーディネートのあり方

組織のつくり方

- 組織のつくり方
- 団体ごとの横のつながりの核の一つとなっている点
- 利用団体内において、組織の育成の仕組

市民参加がしやすい

- 市民参加のしくみ（つくり方）

  環境だけでなく、福祉や子ども等の分野にも広げる
- 子ども・若者の社会参画のしくみ

  次の世代へのつなぎ方
- 新たな環境活動団体設立に尽力されている市民の自己表現社会教育活動をする市民のほりおこし
- 超作戦
  ちょうレンジャー
  蝶
- 暮らしの身近な点を拾い上げて、オープンな点
- 自然系の活動は男性が多い実力を理解する

Bグループ

学びの場

自分が知らないことを学べる機会（知ることの楽しみ）

学び＝自分の興味・関心を高める場

場所（活動する）

まちで四季を感じて生きる

人が地域で集まる春・夏・秋・冬

大きなイベント地域づくり

個人の成長とまわりの成長

虫についての知識の市民への認知

人とのつながり

色々なワークショップの活動でのコミュニケーションの広まり

団体・人を育む

生活と体験をベースに

1人ではなく共に活動する(ゆるやかなネットワーク)組織化

異年齢集団での活動の場の確保

(つながり)利用団体の活動を継続していく工夫が参考になった(高齢化等諸課題をふまえて)

SDGs の実績を(公民館等で)発表している「地球市民学習」(団体)との連携(サマーフェスタ)等が考えられる

様々なイベントで学習コミュニティ確立

今日の発表を基に活動を周知・啓発していくコーディネーター役が必要と感じる

Cグループ

さいたま市生涯学習ビジョンに

つなぐ
期間　全力
次の

見直し

その時にあった活動内容

団体同士の
つながりを作る
「しくみ」
（2015～）

仕組みをつくる
＋
仕組みをつくり
かえる(柔軟に)

「まちづくり」に
つなげるために
「地域活動団体」
の設立を支援する

市の環境局や学校、
社会教育施設と
連携を深める

→ 全体のしくみ

利用者の思い、
動機、やりがい、
経験に耳を傾け、
次の活動につなぐ
支援をする

新たな地域活動
団体の設立支援
に加え、継続す
るための支援を
する

団体の定着化・
継続も大事だし、
新しいことも大事

→ つづける
しくみ

→ 広げる
しくみ

「しくみ」に
はまる人を
育てる

参加者の意識レベ
ルを底上げする
↓
次は受け手でない

育成する
しくみ

「しくみ」の裾野

広げすぎず
大きな枠で
自由な発想を

活躍できる
しくみ

団体の「何か」
に備える
↓
安心につながる

活動を守る
ことについても
明確にする

組織を守る
しくみ
安心して活動

広報
↓
参加者増
↓
育成

机上ではなく実践!!（来者対応）
色々な人がいる